

第7回 ハルファにおけるシュマーレンバッハ学会

－企業フォーラム－（学会紹介）

森 美智代

シュマーレンバッハ経営経済学協会主催の学会が、2005年4月29日（金曜日）にドイツ・ハルファで開催された。この学会は、シュマーレンバッハ協会とハルファ協会（Initiative Pro Halver e.V.）、プライスウォーター監査法人（PRICEWATERHOUSECOOPERS）との協賛で開催された。開催地ハルファは、ケルンから列車で1時間半のところにある小さな町で、従来は重工業地帯・ルール工業地帯の産業で栄えた工業地帯に属している。そのため、ハルファは戦前のドイツ経済の原動力ともなった工業地帯に分布した中小企業の多い町でもある。学会の会場となったヴェルナー・トラック有限会社（Werner Turuck GmbH & Co. KG）は、メレレスベンツ社の子会社で、この会社はハルファの地元の会社であった。2004年4月に開催されたシュマーレンバッハ協会の経営経済学会が、大学研究者と大企業、監査法人関係者が多い学会であったのに対して、今回の学会参加者は、ほとんどが中小企業の関係者であった。

ハルファで開催されたこの学会開催は、2つの意味を兼ね備えているように思われた。

一つには、多くの下請けの中小企業を抱えたハルファで開催されることに意味があった。ドイツの大企業が欧州の資本市場に進出し、国際的にグローバル化していくなかで、「中小企業は、これからどのように経済変化に対応していくべきか」が問われていた。

20世紀初頭には既にモノレールがブッパタールの町を走っており、国際的にも先駆的な経済的背景をもつルール工業地帯は、最先端の技術と経済の全盛期を向かえた。その意味で、ルール工業地帯は、戦前のドイツ経済の活力を担った地域であった。しかし近年、重工業からIT産業へと経済が変化することによって、工業地帯に分布する地域の多くの企業は、大企業の下請け会社として生き抜かなければならない運命をたどることになった。この地帯の中小規模の製造業は、これからの産業の選択と外国への進出が、今後の大きな課題となっている。

人口約18,000人の小さな町、ハルファで開催されたもう一つの意味は、ハルファがオイゲン・シュマーレンバッハ (Eugen Schmalenbach) の生地であることに意味がある。今回の学会は、シュマーレンバッハが没して50年を記念した学会であった。実務における技術とその経験を学問的な理論へと展開していく研究方法は、中小規模の製造業が散在するこの地域の環境から生まれたといえるかもしれない。というのは、一見のどかな平凡な町であるかのように見えるが、独自の先駆的な研究が萌芽した環境をもつこの町には、シュマーレンバッハの生まれ故郷であることと何か共通するものが感じられたからである。この町での学会開催は、小さな町に誕生した偉大な経営経済学者、シュマーレンバッハを讃える学会として、これまでも、今回をあわせて7回開催されることで、地域の活性化の役割も果たしていた。

わが国でも地方分権化の政策のもと、市町村が「町おこし (地域経済の活性化)」に努めているが、ハルファは各市町村の先駆地とも言うにふさわしく、第三セクターの鉄道廃止にあたり、町の駅は「市民のための図書館・喫茶店」 (Stadtliche Bibliothek・Cafe) に改装されて、文化駅 (Kultur-Bahnhof) という住民の憩いの場として開放されていた。ドイツでも各公的機関の会計システムがカメラル簿記から複式簿記へ変換している町が増えているなかで、この町にもその行政改革の波が波及していることが感じられた。小さい町であることが、「町おこし」を可能にしているのかもしれない。しかし改革の波にいち早く対応している様子は、やはりシュマーレンバッハの生地でもある土地柄が感じられる。

2004年のケルンでの学会に比べ、今回の学会は小規模の学会ではあったが、

協賛しているプライスウォーター監査法人は、シュマーレンバッハの生涯と研究生活の記録をCD (写真1参照) にして学会参加者へ配布した。技術工員の父をもつシュマーレンバッハが実務と理論の統合を実現した学問が、ハルファでの幼年時代の生活環境を物語っているようであった。ハルファのシュマーレンバッハの生家は、その名のとおり、細い小川が生家のそばを流れていたことに因んだ名前といわれており、現在は車が行き交う路線沿いにひっそりと佇んでいた。生家は土地の人々によって保存されており、今回の学会ではあいにく夜に、シュマーレンバッハの生家に案内してもらったために、「生家」の写真を写すだけとなった。生家は誰の所有物になっているかは不明である。しかし地元の中小企業の社長ウルリッヒ・ノッケマン (Ulrich Nockemann) 氏は、研究者ではなく、実務家であるにもかかわらず、いまだにシュマーレンバッハの古い研究書を大事に保存しておられた。初対面の我々にその古書を見せてくださったことに少々驚きを感じた。古書はシュマーレンバッハの研究者であれば大変興味深いことであつたであろう。

学会会場では、先のCDの他に、ハルファ在住のヴェルナー・シンヴェル (Werner Sinnwell) 氏によって執筆されたシュマーレンバッハの1873年から1955年までの研究人生が記録された書 (Sinnwell, Werner,...indem man sich selbst treu bleibt) (写真1参照) が販売されていた。この伝説の出版からもハルファ住民の町をあげての学会であることを示していた。またハーゲン通信大学 (Fern Universität in Hagen) の経営経済学研究所には、オイゲン・シュマーレンバッハの名前がつけられているということであつた。これは、今でもシュマーレンバッハがこの地

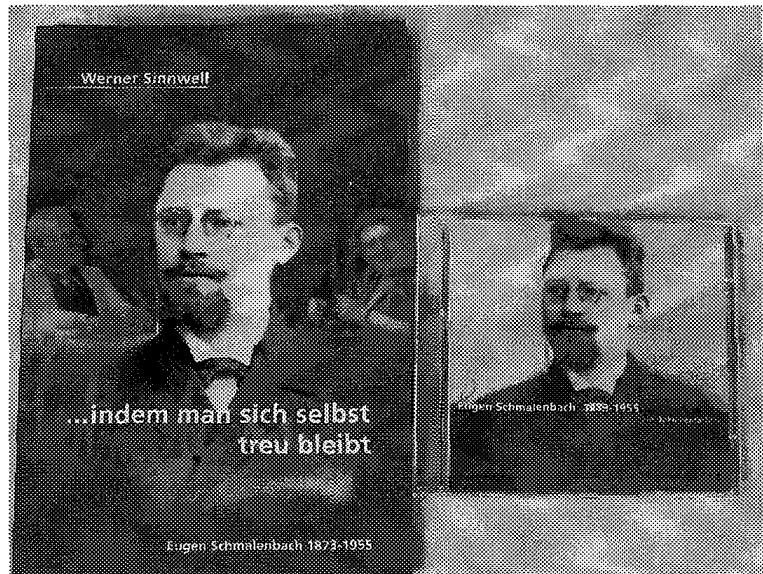


写真1

域の誇りになっているということを示しており、大学という研究機関において

も、シュマーレンバッハの研究業績を評価し、その名を残そうという多くの人々の意向が強く感じられた。

学会報告では、シュマーレンバッハの生き証人として、当時最後の助手であったエーリッヒ、ポトフ（Prof. Dr. Erich Potthoff）教授（写真2参照）によって、



写真2

「シュマーレンバッハ一人となりー研究作品」（“Der Mann- Sein Werk-Die Wirkung”）というタイトルでシュマーレンバッハの生存の研究姿勢が紹介された。報告者は、現在では既に90代の高齢者で、ライプツッヒ商業大学でシュマーレンバッハに師事した弟子の一人であった。シュマーレンバッハは、学生には学校で学ぶことよりも、実務を通じて学ぶことを説き、また研究では細部に至るまで突き詰めるという研究姿勢であったとされる。学会で帰国して直ぐに、この学会終了の翌日にポトフ

教授は永眠されたということをお世話になった地元の社長から報告を受けた。最後の弟子として、ポトフ教授はシュマーレンバッハの研究の偉大さを、後の世に伝えるという使命を果されて永眠されたのではないかと感じている。

プログラム：ビッツ（Prof. Dr. Micheal Bitz）氏（ハーゲン通信大学・経営経済学教授）によって「動的貸借対照表から株式保有価値へー近代的経営学者としてのオイゲン・シュマーレンバッハ」（“Von der dynamischen Bilanz zum Shareholder Value-Eugen Schmalenbach als moderner Betriebswirt”）が報告された。静的貸借対照表が過去の決算であるのに対して、動的貸借対照表は、将来志向の動的な見方であった。彼の動的貸借対照表論は、主観的価値を明らかにすることであり、現在問題となっているノウハウ・顧客関係など、企業のもつポテンシャルを会計上明らかにすることに通じるものがあるという報告であった。

プログラム：キルホフ（Dr.-Ing. Jochen F. Kirchhoff）氏（Kirchhoff [自動車部品メーカー] 営業管理部長）によって「ー中規模企業のためのグローバル化の課

題とチャンスー」(“Probleme und Chancen der Globalisierung für mittelständische Unternehmer”) というタイトルで報告がなされた。この報告では、報告者の会社が、ポルトガル・メキシコ及びポーランドへ進出した時の経験が紹介された。海外進出には、問題点(異国における雇用及び信用獲得の難しさ・言語及び文化の違い)がある一方、人件費及び税金が安いことを考えると、ドイツにとって海外進出はチャンスである。また中規模の企業はEU25カ国の拡大では東欧への市場開拓、アジアではインド・中国への市場開拓、旧ソビエトへの市場進出の国際化に向けて、将来、バイオ・遺伝子工学産業の拡大が期待されることが報告された。

プログラム：ヴンケルヨハーン (Prof. Dr. Norbert Winkeljohann) 氏 (プライスウォーター監査法人) によって「国際的な財務報告基準：中規模企業の国際化のための貢献か？」(“International Financial Reporting Standards: Ein Beitrag zur Internationalisierung des Mittelstands?”) が報告された。

国際会計基準とはどのような基準であるかについて説明され、商法会計にもとづくドイツ会計制度と国際会計基準との相違、棚卸資産、引当金、繰延税、リース、連結などの会計処理について報告された。最近、IASB が、IAS/IFRS の基準においても中小企業向けの会計基準を検討しているなかで、従来は、IAS/IFRS が税規定とは分離した形で論じられてきたが、近年中小企業向けの会計基準として、IAS/IFRS の採用が注目されるようになり、税法規定に向けたIAS/IFRS の基準採用について検討する必要があることが説明された。この報告は、今回の学会でもっとも注目すべき報告内容であった。それは、2005年以降、EUにおける証券市場に上場する大企業にはIAS/IFRS 採用が義務づけられたのに対して、さらにIAS/IFRS の採用を拡げ、中小企業に対するIAS/IFRS の採用についての可能性が報告されたからである。

プログラム：ヴァルター (Prof. Dr. Norbert Walther) 氏 (ドイツ銀行研究所長・ドイツ銀行グループの国民経済学部門チーフ) によって「グローバル化は重力のように現実的である」(“Globalisierung so wirklich wie Schwerkraft!”) が報告され、各種の統計資料を用いて、ドイツと他国の経済数値を比較しながら、今後のドイツ経済成長予測が報告された。

最後に総括質問が出され、その質問に各報告者が回答を与えるという形式で進められたが、総体的な質問内容は、中小規模企業の今後の経営展望に関する質問に集中した。

この学会参加にあたり、ハルファの新聞に日本から参加した我々の記事が掲載されたことについて、ハルファの地元の社長から送られてきた新聞記事（写真2参照）で知ることができた。